競技用品規格

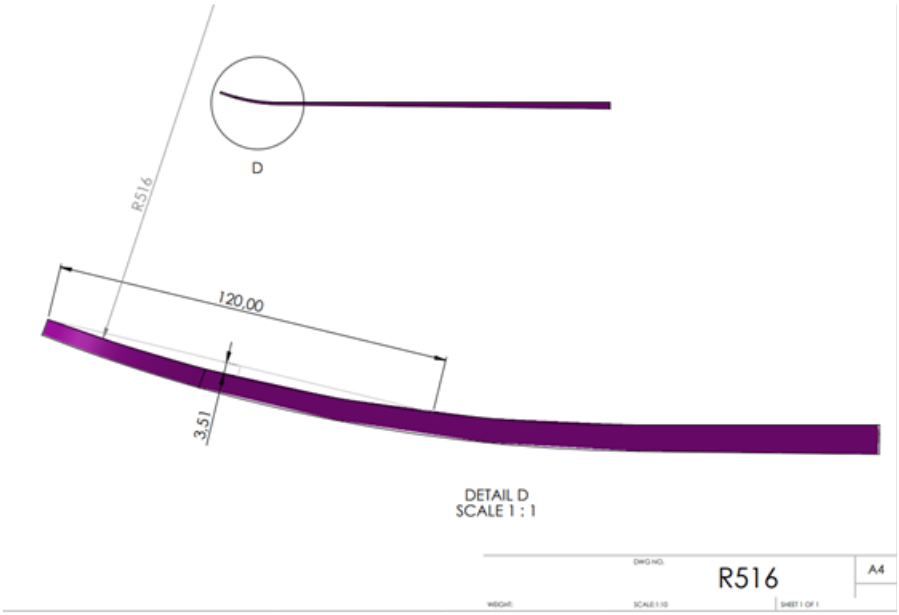
用品開発小委員会

D.　スキージャンプ競技用品

1.　ジャンプスキー（板）

1.2.1.3　ショベルの外形、長さ、高さ

スキーの先端は、個々に変更することができるが、左右対称で中央部に中心があり、かつスキーの長さ57%部分でスキーを面（サーフィス）に押し付けた状態で（スキー全体面を平らな面に置かなければならない）、~~地面~~面（サーフィス）までの間隔が~~30~~ 40mm 以上あることを条件とする。スキーの先端はカーブしてなければならない。カーブの厚さは、スキーの先端から120mm以内最低3.5mmでなければならない。



1.2.1.6　表面（トップ　サーフィス）

スキーの表面は、スキー幅全体にわたり、平らで真っすぐでなければならない。スキーは同一の高さで凹凸の無い曲面でなければならず、目に見える突起物、こぶ、刻み込みがあってはならない。

1.2.3　質量

スキー1本あたりの重量は、何も取り付けていない状態で、その長さに適合する最小重量を満たさなければならない（長さをcm表示した数字 = 重量をkg表示した数字：例として250cm =2.50kg、262cm = 2.62kg）。重心のバランスをとるために使用する鉛のウェイトは考慮されない（1.2.6.2 条参照）。スキーの重量は、ビンディング（ビンディングシステム全体 - スキーウエッジ及びネジを含むフロントとバックパーツ）を含んで計測できる。この場合、スキーの重量は、重さ最低200gのビンディングを加えたスキーの重量（スキーの長さに一致する最低限の重量）を示さなければならない。

2. ジャンプスキーのビンディング

セーフティビンディングは、負荷制限装置として機能する。すなわち、これらの装置は、滑走中に発生する特定の要求を許容できる限界まで伝えるが、この限界を超えたとき、しっかりと固定していた状態からスキーをリリースする。

テイクオフの補助として、あらゆる種類の外的エネルギーを生み出す追加装置を禁止する。

ビンディングシステム一式は、スキージャンプシューズがスキー板に左右対称に固定され、滑走方向~~にを中心として~~平行に取り付けなければならない。ビンディングはスキーに平らに取り付けなければならない。ビンディングの前部（フロントパーツ）の全ての取り付けネジは、ビンディングのロックパーツの前になければならない。シューズの前部がビンディングの前部に固定された後は、シューズはスキーの表面に平行になるように固定されなければならない。シューズソールのヒールウェッジの輪郭は、通常生産されている状態で、ジャンプスキーのサイドウォールをはみ出してはならない。ビンディングシステム全体、すなわち、ビンディングのスキーウエッジ及びネジを含むフロントとバックパーツの重量は、最低200グラムとする。

3. スキージャンプブーツ

3.1.1 ~~シューズ~~ブーツサイズと形状は、足のサイズと形状と同じでなければならない。ブーツサイズ測定（内外）の最大許容差はプラス2cmとする。

3.1.2 空気力学的効果を高める目的で、ブーツの形状を変えることは認められない。

3.1.3 ブーツソールは45mm以下でなければならない。

3.1.4 ブーツの後ろ側（リア）パーツの傾斜角度は、内側の測定で64度を下回ってはならない。

3.1.5 ブーツのバックパーツのエッジ最後部の厚さは、ウエッジ着用時のウエッジを含め80mmを超えてはならない。ヒールに向かってブーツの後ろ側パーツのデザインは形作られたウエッジでなければならない。サイドの厚さは同じでなければならない。足関節周り（ブーツのボトムパーツ上10cm）の最大周囲は45cmを超えてはならない。

夏にテスト段階

3.2　ブーツの後ろ側パーツのカーボンシールド（スポイラー）は認められる、しかし、面積全体をブーツ面に付着させるが、ブーツ面を超えてはならず、左右対称に取り付けなければならない。ブーツやシールドにスーツを固定出来ないようにこれらをブーツ面に取り付けなければならない。

3.3　ブーツ内側にウエッジを飛行中着用することが出来る。ウエッジは、左右対称でなければならない。以下の最大サイズが認められる、バックパーツ：5.5cm、サイド：各サイド 1.5cm、フロントパーツ：0.5cm。ウエッジの開口部はフロントパーツの中心に位置しなければならない。各サイドの開口は認めない。飛行中、ウエッジの上部エッジは、ジャンプブーツの上部エッジを越さない低い位置になければならない。ウエッジは、左右対称にブーツ内側に位置しなければならない（ブーツ内側のウエッジを回転させることは認められない）。

ウエッジを含むブーツの後ろ側バーツの厚さの合計は、80mm を超えてはならない。ブーツ外側のサイズや形状は FIS の測定・コントロールシステムに合致しなければならない。インナーブーツを使用する場合、スーツはインナーパーツに固定しなければならない。

4.　スキージャンプスーツ

スキージャンプスーツの全ての部分は、同一素材（4.2条　参照）で作られていなければならず、また外側からも内側からも、同一の空気透過率でなければならない。
スーツは、フロント中心のジッパーで閉じなければならない。閉じたジッパーストラップはえりより1.5cm　から5cm　飛び出していなければならない。ジッパーの下部の長さは、股下のクロスする部分より最低10cmのものまで認められる。このジッパーの幅は、15mm以下でなければならない。襟（カラー）は円形でなければならない。カラーの前後の高低差は最低1cmなければならず（常にフロントパーツがバックより低い）、5cmを超えてはならない（添付図のマークX1及びX2を参照）。
[中略]
追加規制　：
- スーツへのマーキング（測定及びコントロールのため）を認める。
- スーツの厚さは、全てのパーツで同一でなければならない。
- 素材やスーツへの、化学的（気体、液体、固体）または機械的処理は認められない。
- 首周りの高さの前後差（前部と後部の高さの差）は、5cm以下とする（添付図のマーク X1、X2　を参照）。
- 外側のタックやダーツ、折り目やパッドは認められない。
- スキーブーツにスーツを取り付けるために使うストラップは、片足につき1　本とし、固定された（調整できない）タイプのみ認める。ストラップはひとつの連続したピースから成り、クリップ、バックル、または複数の素材をつなぎ合わせる機能のないものとする。ストラップは、足パネルの内側と外側のシームの真ん中で、スーツの縁部分に固定しなければならない（添付図のマークSを参照）。足の縁（leg hem）はストラップ幅にわたり真っすぐ水平にカットしなければならない。ストラップ幅は、最低2cm、最大4cmでなければならない。足の縁の両サイドは、同じ高さで水平にカットしなければならない。ストラップは飛行中ブーツ周りに左右対称に位置しなければならない。

[中略]

7. スキーグローブ

グローブは、外気や外力から保護するカバーである。グローブの着用は全ての試合において義務である。

グローブサイズは、手のサイズに一致していなければならない。素材の厚さは5mm 以下とする。

~~五本指タイプのグローブのみ、使用が認められる。~~ミトンは認められない。
フィン形グローブは認められない。手首周りにゴム製又はシリコンでコーティングしたグローブは認められない。いずれにせよグローブを袖やスーツに固定することは認められない。

測定方法ガイドライン

スキージャンプスーツ

選手の測定

測定中、選手はゆったりした姿勢で~~立って~~いなければならない。服はショーツ一枚で裸足とする。スリップタイプのアンダーウエアのみ許可する~~(写真 A-男子、B-女子参照)~~。

~~選手は、測定前にコントローラーの立ち合いで自身のアンダーウエアを着替えなければならない。~~
ボディー、脚、腕の周りは軸に 90 度で測定されるが、以下は例外とする:
[中略]
B) 身長及び股下測定
選手の身長はレーザーツールで測定され、選手は平らな面(床またはテーブル)に仰向けに横になり、脚をのせ、頭、肩甲骨、臀部、ふくらはぎ、かかとを面につける。
座高は、直立姿勢で平らな面(テーブル・ハイチェアー)に座り、脚はヒザを 90 度角に曲げ床にタッチしない状態で測定する。
股下は、測定した身長から座高を引いて決める。

~~股下:地面から股下までの垂直測定:脚はまっすぐで足は 40cm 離さなければならない。~~
~~かかと、ふくらはぎ、尻、肩、頭を壁に付けなければならない。~~
~~標準測定要素:~~
~~・身長~~
~~・股下の長さ(B,C 参照)~~
~~・腕の長さ(A 参照)~~
~~・首のサイズ~~
~~・足のサイズ~~

~~選手から再測定の要求があった場合、大きい数値(身長、長さ)が考慮される。~~

スーツの測定

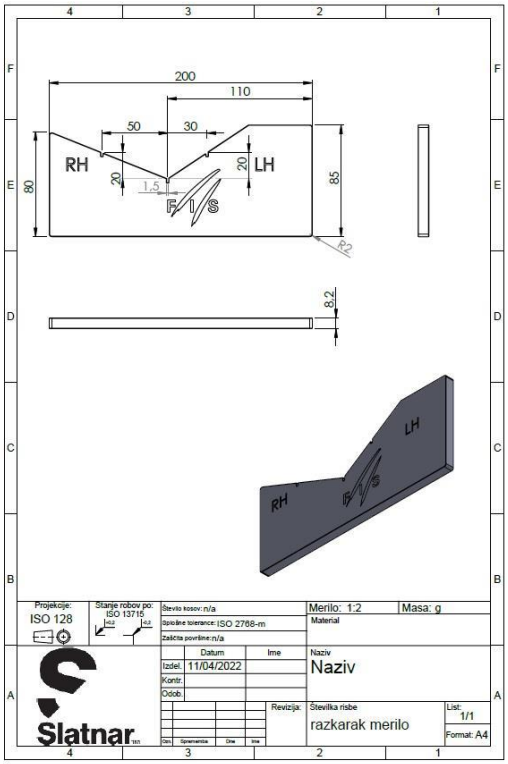
[中略]

C)　股下：地面から股下まで垂直に測定する。選手は飛行中やジャンプ前のスタートコントール中、~~ジャンプ台でジャンプ前と~~同じように（ブーツに装着された）ジャンプスーツおよびブーツを着用しなければならない。測定時は足を ~~40~~ 30cm 離し、脚は完全に伸ばさなければならない。測定した股下サイズは選手のボディーで測定した股下サイズと一致しければならない。~~股下の長さと適合のコントロールは同時に実施されなければならない。~~

D)　クロッチのシームクロス部分（Sx）がスーツの最下部でなければならない。このクロス部分はスーツの真ん中で（フロントからバック）最大許容差 2cm とする。

~~E)　スーツ内側腰骨真上にジッパーからジッパーまで腰回り水平に非伸縮性ベルトを縫い付けなければならない。同ベルトの幅は 2～4cm、厚さ最大 2mm でなければならない。ベルト周りのスーツ寸法は、ベルト自体を含め、ベルトの下側のシームの上下 5cm とし、スーツを伸ばした時でも、ボディー寸法を超えてはならない。スーツの身体にフィットする部分（ベルトの上下 5cm）からスーツサイズの許容値までの移行は、デコボコの無い緩やかものでなければならない。~~

E)　股下 - スーツを裏返しに置き、以下のテンプレートに従い、2cm の高さで、フロントシームは股下シームのクロス部分から前側に最大 3cm 突き出てなければならず、バックシームは股下シームのクロス部分から後ろに最大 5cm に突き出てなければならない。股下シームのクロス部分は常に最下点でなければならない。



競技用品コントロール
選手のボディーのあらゆるポイントを測定可能とし、かつ、スーツ上で同じ部分を測定・比較することができる。選手がスーツを着用し測定する際、選手は両腕を伸ばしヒジをボディーから 30cm 離す。脚も伸ばし ~~40~~ 30cm 離す。選手は直立姿勢で立たなければならない。

ジャンプスーツはすべての箇所で選手のボディーにぴったり合うもののでなければならない。
直立姿勢でスーツ寸法はボディー寸法と一致しなければならず、最大許容差はスーツのあらゆる部分においてボディーに対し　最低 ~~1~~ 2cm、最大 ~~3~~ 4cm~~（女子スーツは最低 2cm、最大 4cm）~~とする。
ただし、ブーツ周辺部分は例外とする：ジャンプスーツは、ブーツ周辺寸法より最大 10cm 大きくすることができ（ヒザより下）、ブーツを覆わなければならない。スーツは身長に沿って上下に動けるように作られなければならない。スーツはボディーの如何なる箇所に固定することは出来ない。